

引き裂かれる〈鳩〉の象徴性

——安部公房「手」の同時代的読みの可能性——

木 村 陽 子

1 日本共産党入党と〈鳩〉の物語

安部公房の共産党入党の時期に関しては、今日二つの説が流通している。一方は一九五一年三月下旬とする説で、『安部公房全集003』⁽¹⁾（一九九七・一〇、新潮社）がこの立場をとる。他方は当時安部の入党推薦者であった増山太助氏による証言に基づいた「一九五一年初夏、朝鮮戦争が峠を越した頃」とする説で、谷真介編著『安部公房評伝年譜』（二〇〇二・七、新泉社）では増山説に基づき、安部の入党の時期を一九五一年六月頃に置いている。わずかに二、三ヶ月の相違ではあるが、その間に「赤い藪」による第二回戦後文学賞の受賞（一九五一・四、月曜書房からの「壁」の刊行（一九五一・五）といった重要な事項を多く含んでいるだけに、入党の時期の確定は研究史上小さからぬ問題の一つであった。

ところが、二〇〇四年二月に掲載された桂川寛の証言⁽³⁾によって、〈三月に入党申し込み、五月に入党〉という新たな説が提出

された。この説は証言者である桂川が、当時安部の入党と行動ともにした当時者である点から、現時点において最も信頼性の高い証言であると考えられる。

いずれにせよ、安部は一九五〇年十二月、『壁』収録作品の「赤い藪」「洪水」「魔法のチョーク」を「三つの寓話」の表題で「人間」（目黒書房）紙上に発表して以降、一九五一年七月三十日、「壁」——S・カルマ氏の犯罪——で第二回芥川賞を受賞するまでの約半年間、既に発表された作品がそれ相応の評価を得ていたにもかかわらず、わずか二つの小説しか発表しなかった。一方が「チーズ戦争」（一九五一・六、季刊「草月」）であり、他方が「手」（一九五一・七「群像」）である。原稿用紙五枚程度の小品である「チーズ戦争」を別とすれば、「手」は「壁」刊行以後、共産党入党以後に発表された最初の重要な作品であるが、その存在は必ずしもよく知られているとは限らず、そればかりか先行研究においてこれまでほとんど注視されてこなかったテクストである。

一読してまず印象深いのは、「手」が全知の視点を有した平和の鳩の像による語りという風変わりな設定によつて書かれていることである。この「平和の鳩」という語にも象徴されるように、「手」が発表された一九五一年前後は、国際的な冷戦体制の深刻化を背景とした朝鮮戦争の勃発、核兵器への脅威などを契機として、「平和」をめぐるさまざまな議論が錯綜し、「平和」要求が世界的規模において大衆運動化していった時期であつた。

一九四九年八月、アメリカの原爆独占に対抗してソ連が原爆実験を成功させて以降、米ソを中心とした核実験による威嚇合戦がエスカレートし、一方で人類の生存そのものを危機に曝す原爆戦争を回避するための努力が、この時期世界的規模で開始された。

一九五〇年三月、《原子兵器の無条件禁止要求》を呼びかけたストックホルム・アピールに対しては同年十一月までに五億人（日本は六四五万余）の署名が、また一九五一年二月、《米・英・仏・ソ・中国の五大国による「平和協定」締結》を呼びかけたベルリン・アピールに対しては六億人（日本は五・一八万余）の署名が集まり、当時の「平和」への関心の高さを窺うことが出来る。

一方、国内では朝鮮戦争直前の一九五〇年の年明けは、再軍備を示唆するマッカーサーのきな臭い声明から幕を開けた。日本の進路転換を懸念する人々の間で危機意識が急速に高まり、《戦争》と《平和》の選択を迫る防衛問題をめぐつて議論が沸騰する中、一九五〇年六月には朝鮮戦争が勃発、十月末の中国の参戦、さらに十一月、トルーマン米大統領が朝鮮戦争での原爆使用を示唆したことなども相俟つて、東アジア全体が一気に緊迫ムード

に包まれた。⁽⁸⁾ 巷では第三次世界大戦勃発の噂が実しやかに口にはせられるようになり、雑誌『世界』⁽⁹⁾では「一九五三年——果して危機か——」と題された座談会が設けられ、「なぜ五二、五三年が噂にのほるか」「五二、五三年危機説を否定する条件と軍備競争の将来」などが現実味をもつて討議された。桂川寛によれば「気の早いやつは疎開の準備した（ママ）やつもいた」という。⁽¹⁰⁾ 《平和》の有り難味を誰もが皮膚感覚で痛感していた時代であり、志ある者の誰もが、何らかの形で行動要求に強く駆られたであろうことは想像に難くない。

しかし他方、大衆運動の激化や共産勢力の拡大を恐れた連合国軍総司令部（以下GHQ）や日本政府が、この時期平和運動に対する露骨なまでの弾圧の姿勢に転じた。一九五〇年六月にはデモ・集会の禁止、共産党支持者への弾圧が開始され、七月にはマッカーサーが警察予備隊（七五〇〇人）創設を指令した。⁽¹¹⁾

このような前後の状況の中、安部は一九五一年五月、共産党に正式入党し、『群像』七月号に「手」を発表した。発表直前の六月一日、安部は自身の提唱によつて人民芸術集団を発足し、同年八月五日から十九日にかけてベルリンで開催された「平和擁護第三回世界青年学生祭」（以下ベルリン平和祭）に自分たちの選出した代表を送ることをサークルの当面の運動課題と位置づけた。ベルリン平和祭には、当時『新日本文学』も積極的にかわつており、峠三吉の『原爆詩集』をはじめとした詩集二一作品、小説二作品を同平和祭へ送ったこと、また「世界最初の原爆被害国の文学者だ」という悲しむべき資格」において原爆禁止を強く主張し

たこと等を、同誌八月号において中野重治が表明している。当時『新日本文学』と激しい対立関係にあった『人民文学』の編集には野間宏が携わっていたが、その野間との精神的結びつきの強かった若き安部が、『新日本文学』への対抗意識、あるいは桂川の言葉を借りれば「入党した実績をあげたい」という「跳ね返り」の「思いつき」⁽¹²⁾から、代表者送り出しに固執したのであろう事情が推察される。計画は結果的には失敗に帰したものの、自らが文化オルグとして関わった地域詩サークル「下丸子文化集団」の『詩集下丸子』創刊号（七月七日）を、『ベルリン平和祭参加号』と銘打ったり、会合を頻繁に催すなど、六月から七月にかけて、安部は精力的に活動を展開した。⁽¹³⁾

これらの状況、また入党直後、それ相応の志気をもって執筆にあたったであろう安部の心情を推し量るならば、この「平和の鳩」を語り手とする物語にも、当時の「平和」議論が何らかの形で寓意として描き込まれていると考える方が自然であろう。本稿ではこのような問題関心から、以下、小説「手」について同時代的な文脈の中での解説を試みていきたいと思う。

2 「おれ」と「手」の反・戦後性

「手」（一九五一・七）は、かつては有能な生身の「伝書鳩」であり、現在は肉体を喪失して「平和の鳩」の像と化した語り手である「おれ」が、かつての主人であり、自身に「変形」という運命を与えた男（「手」との半生を回想し、その運命の「完了」までの道程を語った物語である。戦前は有能な「伝書鳩」と鳩班

の兵隊として、戦後は見世物小屋の「手品の鳩」とその飼い主として、互いに依存しつつ生きてきた「おれ」と「手」との関係は、「手」が生活苦から「紙幣何枚か」の値で「おれ」の命を売り渡したことによって突如断絶する。それによって「おれ」は殺され、「へくせいの鳩」へ、さらには「平和の鳩」の像へと変形され、一方「手」は痛烈な「後悔」から次第に精神の均衡を損なっていく。

ではなぜ一羽の鳩の喪失が男をそのような狂気にまで駆り立てたのだろうか。語り手である「おれ」によれば、「手」の狂気は「日々の不幸が何かおれに対する罪のせいであるかのような妄想」（四八頁）⁽¹⁵⁾に憑かれたことに起因すると言う。「手」が感じていたであろう「おれに対する罪」の意識とは、無論「かわいがっていた鳩の命を金に代えたことに対する良心の呵責」といったような単純な理由ではなかっただろう。終戦と同時に襲いかかった無規律と混乱の中、日々の糧にすら困窮した人間が、一羽の愛鳩の命を金に代えることに精神のバランスを損なうほどの後ろめたさを感じるとは考えにくい。むしろ「おれ」が戦時中「英雄勲章」まで受けた軍用鳩であったこと、そしてその鳩が終戦後も変わらず男の「自慢」（四六頁）であったことに留意するならば、「手」を狂気へと導いた直接の契機は、英雄的「伝書鳩」が「平和の鳩」という反・戦争的シンボルへと作り変えられてしまったことに對する強烈な違和感、そしてその捏造に加担した自らに對する罪悪感に由来していたと考えられるのではないか。

そもそも戦時中の英雄的「伝書鳩」であった「おれ」に異常な

執着を示し、両者の相互依存の生活スタイルを終戦後も頑なに維持し続けた「手」という男は、極めて反・戦後的な価値観の所有者である。そうした「手」が「平和」という戦後的価値への反発から、「おれ」を「手」の運命、すなわち戦前の価値の側へと引き戻そうと躍起になったとしても、それなりに納得がいく。

しかしテクストを読み進めて行くと、さらなる疑問に突き当たる。「鳩を取り戻す」という「手」の異常な願望の背後に、狂気の「手」を唆して利用した「反平和主義者」(「政府のまわし者」)たちの陰謀があったことが、語り手によって明らかにされるのである。「政府」反・平和主義者」対「大衆」平和主義者」という軸が後景として浮上することによって、テクストを単純に「手」と「おれ」をめぐる「戦前の価値と戦後の価値との闘争の物語」とは位置づけられなくなってしまうのである。「鳩」の象徴性をめぐる前景としての「手」対「おれ」の物語、そして後景としての「政府」対「大衆」の物語、これらは一体何を意味しているのか。結論を急ぐ前に、まずは近代以降、特に第二次世界大戦前後から「手」の発表された一九五一年前後にかけての、「鳩」をめぐる言説状況を確認しておこう。

3 近代戦争と「伝書鳩」

日本の軍用鳩の歴史について論じた文献は、戦時下での焼失や敗戦時の軍による資料の焼却などによって意外にも少ない。本稿では戦時下に東京日日新聞社伝書鳩班の編纂によって刊行された「伝書鳩の話」(一九三四・八、東京日日新聞社・大阪毎日新聞社)、

また膨大な聴き取り取材によって日本における軍用鳩の歴史を再構築した近年の労作である黒岩比佐子著『伝書鳩——もうひとつのIT——』(二〇〇〇・一二、文芸春秋)の二書を主として参照し、近代戦争と伝書鳩とのかかりについての概要把握を行うこととする。

鳩の帰巢本能を利用した伝書鳩の歴史は古く、旧約聖書の「ノアの方舟」の挿話の中にも見られるが、特に情報戦の様相を呈した近代戦争においては、軍用鳩を用いた鳩通信の需要が急激に高まった。十九世紀、ヨーロッパ各国では、国家戦略として優秀な通信鳩を育成する法律やシステムの整備がすすめられ、通信技術の発達した二十世紀以降も、需要が低下しないばかりか用途がさらに多角化し、鳩に小型カメラをつけ軍事的な重要拠点を上空から撮影する「スパイ鳩」の養成や、敵の毒ガス攻撃から鳩を守るための「鳩マスク」の開発が行われるなど、軍用鳩は近代戦争に欠くべからざる重要な武器の一つと見なされるまでに至った。

一方、日本での軍用鳩の育成は、一八八七年前後に陸軍において開始されたが、本格的な始動は第一次大戦におけるヨーロッパでの軍用鳩の驚異的活躍に刺激を受けて以降のことであった。一九一九年四月には新たに陸軍軍用鳩調査委員会が発足、フランスから一千羽の優秀な種鳩を購入し、陸軍電信隊の置かれた東京中野の地は、以後日本の軍用鳩養成の一大拠点となった。その結果、一九一九年七月のシベリア出兵を皮切りに、満州事変、日中戦争で鳩通信が実用化され、太平洋戦争では伝書鳩の華々しい活躍を見るに至った。

軍用鳩が徐々に実績を上げるのと並行して、民間でも熱心に鳩を飼う人々の数が増加し、日本の鳩界は急速に裾野を広げていった。軍は民間人の鳩飼育を奨励する意味から、軍用鳩調査委員会が輸入して繁殖した血統書つきの鳩を希望者に対して払い下げ、また民間で行われる鳩の競翔会に賞状や優勝旗を授与するなどの労を惜しまなかった。それに呼応するように全国各地で愛鳩家の団体が相次いで発足し、一九二〇年代半ば（昭和初期）に日本は伝書鳩の全盛期を迎えることになる。

当時の状況を知る山本雅嗣氏によれば、戦争中、軍用鳩は「軍の武器の一つ」ということで、「猫を飼うより鳩を飼う方が、愛国心¹⁶があつて立派な国民」であるとする概念が広く普及していたという。また飼育者ばかりでなく、命を賭して重要文書を運ぶ伝書鳩そのものが「愛国」の象徴として国民の戦意高揚に利用されることも多く、「可憐な翼の戦士」を賞賛する、いわゆる「鳩美談」が教科書や新聞等のメディアに多く登場した。また鳩の武勲を称えるため、一九三九年五月、陸軍省では鳩に勲章を与えることを決定し、功績によって「甲功賞」「乙功賞」「丙功賞」の三種類の脚環がつくられた。一九四一年八月、十九羽の軍用鳩が初の甲功賞を受賞したが、中でも最も勇猛なことで知られた「七七号」の受賞を祝って、当時「軍用鳩七七号」という歌が作られたり、あるいは同年、日比谷新音楽堂で「軍用鳩感謝の夕」が開催され、西条八十・細川潤一といった当時の人気作詞家・作曲家によって作られた「勇ましき軍鳩」という歌が発表されたりした。

以上のように、近代戦争と伝書鳩とのかわりは、今日私たち

が思っている以上に根の深いものがあつた。伝書鳩はなまじつかの近代兵器や通信技術にも引けを取らない有用な「武器」と見なされ、またそれゆえに「愛国」という象徴性をも獲得していたのである。

英雄的「伝書鳩」から「手品の鳩」へはくせいの鳩を経て「平和の鳩」へ、さらには「ピストルの弾」へと流転する「おれ」の「変形」の運命は、「伝書鳩」から「平和の鳩」への移行において、まさに「手品」のように意味を百八十度転倒させたのである。しかし結末部において、「おれ」は「平和の鳩」から「ピストルの弾」へと再びその意味を反転させ、「伝書鳩」に執着し続けた男「手」の殺害によって「最後の変形を完了」する。戦時中「伝書鳩」という有用な「武器」として活躍した「おれ」が、最終的に「ピストルの弾」という武器そのものへと変形を遂げ、武器の「運命」である生命の殺戮をもってその任務を完了したことは、「おれ」が語るように、確かに「唯一必然の道」であつたと言えよう。

4 「鳩」をめぐる同時代の状況

4・1 ピカソの「鳩」と共産主義

では戦後以降、「鳩」の象徴性はどのような変化を遂げたのか。前述したように近代以降の軍用鳩の活躍によって、戦時下の「鳩」は愛国心や理想的兵士像の象徴として多く称揚された。しかし、それより遙か以前に遡れば、「鳩」、特にオリヅの葉や枝を口にくわえた「白い鳩」の図像は、既に古代イスラエルの時代

から「神の平和の伝達者」としての象徴機能を果たしてきた。特にキリスト教図像学においては、何世紀にもわたって「鳩」は信仰、柔和、忠実、純潔などキリスト教的美徳の象徴として位置づけられ、それらが発展する形で、近代以降には政治的意味における「平和」(すなわち戦争でない状態)の象徴として用いられるようになったのである。⁽¹⁸⁾

ところが、このようなキリスト教圏における「鳩」、あるいは理想的兵士像としての「鳩」のイメージを一掃してしまうような、強力な「鳩」が第二次大戦後に登場した。一九四九年一月に制作され、同年四月にパリで開催された共産党主催の第一回世界平和擁護者大会のポスターとして使用された、ピカソの「平和の鳩」のリトグラフである。ポスター制作の依頼を友人アラゴンより受けたピカソは、極めて平明に描いた愛らしい「平和の鳩」のリトグラフをそれに選び、千五百枚刷られたそのポスターはたちまち世界的な評判を呼んだ。⁽¹⁹⁾さらに翌一九五〇年十一月、ワルシャワで開催された第二回平和擁護世界大会のポスター用に「飛翔する鳩」を描いたことによって、ピカソの描く全ての鳩が「平和の鳩」であると見なされるようになった。特に「飛翔する鳩」の図像は発表以後、繰り返し模写され、木彫され、鋳造され、旗布に染色され、また詩に歌われた。その異様なまでの「鳩崇拜」の状況に、次第に欧米諸国は「ピカソの鳩」に脅威を感じるようになっていった。⁽²⁰⁾

この影響はほどなくして日本にも及んだ。たとえば一九五〇年六月十五日の『東京大学学生新聞』には、同年五月のイールズ声

明の撤回を求めるデモンストレーションの際に、「赤青に白鳩」というユニークな旗と共に姿を表した「東大反戦学生同盟」の記事が掲載されている。この「赤青に白鳩」を配した旗は当時「反戦旗」として多く用いられたものであり、同年六月七日の『朝日新聞』(日刊)に掲載された共産党本部の写真にも、正面入口に大きく掲げられた同旗を認めることができる。あるいは同年八月十一日の『朝日新聞』(日刊)「社説」では、六月二十五日の朝鮮戦争勃発の経緯について、「ピカソのハト」を旗印に「平和」を唱えた国際共産勢力は、弱いと見て容赦なく朝鮮を侵略して来た」との見方を示している。

一方、ピカソの共産党入党の報道以前、世界で最もピカソの画を賞賛し、大金を投じて彼の画を買い集めていたアメリカは、ピカソが共産主義国の平和のために鳩の図案を制作したことに對して強い不快感を覚えていた。そのことが大きく表面化する事件が一九五四年、米国統治下の沖縄で起こっている。

一九五二年四月に発足した琉球中央政府の立法院議事堂庁舎が、一九五四年七月に落成式を迎えることになった。議事堂庁舎正面には沖縄住民の永久平和のシンボルとして、田辺泰のデザインによる「平和の鳩」のブロンズ像が取り付けられる予定であった。完成間近の一九五四年四月七日付「琉球新報」(朝刊・三面)には「政庁正面に平和の鳩 田辺早大教授苦心の作」との見出しとともに、「平和の鳩」の完成に至るまでの経緯や制作者の談話などが掲載された。しかし、この四月七日の「平和の鳩」報道を知った米軍の意向によって、「平和の鳩」の取り付けが突如禁じ

られるという事態が発生した。四月十四日『琉球新報』（朝刊・三画）には、図面の審査委員の一人であった山里永吉が「ブロンズ（鳩）は赤のシンボル」であるとする米軍側の物言いに反論する内容の談話が掲載され、さらに翌十五日、同紙（朝刊・三画）に米軍の見解が掲載された。それによれば「鳩は一九五〇年以前、自由諸国の平和のシンボルとして愛用されていたが一九五〇年の世界平和連盟会議に出席したフランスの画家ピカソが共産国の平和のために鳩の図案を作製したため、この鳩は共産主義の象徴に転用されだし、去年のメーデーに使用した人民党の党旗にも描かれ、共産党と一線を画する必要があると好ましくないということがあらかにされた」とある。これらの例からも明らかのように、「手」の執筆された一九五〇年代前半において、「鳩」は単に「平和」のシンボルとして流通しただけでなく、「共産主義の象徴」という新たな意味をも附加されるようになったのである。

以上のことを踏まえたうえで、テキストにおける「平和の鳩」の意味を考えてみよう。「平和の鳩」である「おれ」によれば、「手」を唆し「おれ」を盗み出させたのは「政府のまわし者」であり、「役人たちは、彼をつかっておれを盗ませ、つぎに彼を亡きものにしよう」とくわだてたのだ（四九頁）という。ではなぜ「政府」の「役人」は、そのような回りくどい策を弄してまで「平和の鳩」を排除しようとしたのか。別の箇所では彼らが「反平和主義者」と呼び変えられているのを根拠に、彼らが「反平和主義者」だから「平和の鳩」を敵視したのだと考えるのでは、いささか安直に過ぎるだろう。「彼らはおれが目ざわりだった。おれ

を存在させているものたちが目ざわりだった。」（四九頁）という「おれ」の言にもあるように、「政府」が敵視しているのは、「おれ」、すなわち金属塊から成る鳩のオブジェ自体ではなく、その鳩のオブジェに「意味」を見出す者たち、そしてその「意味」自体に対してである。前述したような同時代の「鳩」をめぐる言説から推して、この「意味」が「共産主義」を指していることはもはや明白であろう。平和運動に名を借りて運動を推進する共産党の勢力拡大を懸念する「政府」が、大衆の「鳩」崇拜の気運に警戒感を抱き、「鳩」排除を目論んだのである。すなわち、「手」と「おれ」をめぐる物語の後景に位置する「政府」対「大衆」の闘争の物語とは、「平和」の所有権をめぐる争う「自由勢力」対「共産勢力」の寓意として読むことが可能なのではないだろうか。

4・2 警察予備隊の（鳩）と「ピストルの弾」

戦後の日本に登場した新たな（鳩）の象徴性として、「ピカソの鳩」平和・共産主義の他にもう一つ忘れてはならないものがある。それは警察予備隊がシンボルマークとした「旭日」を背にした鳩の徽章である。

周知の通り、警察予備隊は一九五〇年六月二十五日の朝鮮戦争勃発によって、朝鮮へ出動した米軍の穴埋めのための補充部隊として創設された、実質的には四個師団相当の歩兵部隊である。創設当初は完全に米軍の指揮と管理の下に置かれ、隊員へのカービン銃七四〇〇挺の貸与も一〇パーセント米軍から支給されて

いた。藤原彰⁽²⁷⁾の指摘によれば、米軍による警察予備隊創設の当初の思惑としては、国内向け武力としての側面と対外的武力としての側面が期待されていたという。「国内向け武力」とは、警察予備隊令第一条に掲げられた「わが国の平和と秩序を維持」すること、具体的には大衆運動の鎮圧が意図されていた。すなわち、「平和維持」という大義を掲げて「反戦・平和」運動を武力によつて鎮圧するという矛盾を、創設当初から警察予備隊は抱えていたのである。

一方、実質的には明らかに軍隊であるにもかかわらず、平和憲法の存在や国民の反戦・平和の機運への配慮から、政府は当初から「警察予備隊は軍隊ではない」という建て前に終始していた。そうした政府の建て前を象徴的にあらわしたのが「旭日を背にした鳩」の徽章であった。「警察」であることを意味した「旭日章」と「平和」維持目的であることを意味した「平和の鳩」、二つの建て前の結合によつて成り立ったのが警察予備隊であった。こうした矛盾は隊員の採用過程やイデオロギー教育の面においても露呈した。当初、GHQは旧軍人の利用案に反対し、幹部には旧内務警察官僚をもつて充当しようと目論んでいたが、組織としての体裁が整うに連れて、現実問題として部隊指揮の能力を持つ旧軍人を採用せざるを得なくなった。その結果、GHQの対日態度もなし崩し的に変化し、旧軍人の公職追放解除と幹部への採用が急ピッチで行われた。次に関係者の頭を悩ませたのは、旧軍隊との断絶を求められた隊員のイデオロギー面での教育であった。一九五〇年前後は国内的にも対外的にも、天皇制はおろかな

シヨナリズムの喚起ですら公には表明し難い状況にあった。⁽³⁰⁾総監に就任した林敬三は、警察予備隊の根本理念を「われわれの父母、兄弟、姉妹、妻子、この人たちが平和に生活し、成長していくことを同胞として願う同胞愛の精神」に求めると説明した。すなわち実質的な軍隊である警察予備隊までもが、理念として「平和」を掲げたのである。

以上の状況を確認したうえで、テキスト結末部の解説へとすすみたい。

これまで見てきたように、〈平和の鳩〉である〈おれ〉が立たされた「政治の力学の四つ辻」(四八頁)とは、反戦・平和を要求する大衆、および彼らを領導しようとする共産主義者、そうした共産主義勢力を排除しようとする躍起になる「政府」、そして戦前の価値観に呪縛された〈手〉といった具合に、異なる世界観がモザイクのように混在し、せめぎ合う場であった。そしてその中心に〈鳩〉が掲げられている。それは戦争反対者にとっては〈反・戦争の象徴〉であり、共産主義者にとっては〈共産社会の繁栄の象徴〉であり、自由諸国支持者にとっては〈民主社会の繁栄の象徴〉であると同時に〈破壊的赤色分子の象徴〉でもあり、戦前の価値観の所有者にとつては〈戦争・愛国の象徴〉であった。

一触即発の不穏な空気に包まれた「政治の力学の四つ辻」、しかしそうした緊張状態は、「政府」に唆された〈手〉が〈鳩〉を奪取したことによつて突如破られた。「政府」は〈手〉の〈伝書鳩＝戦前の価値〉への執着をうまく利用して、敵対者たちから〈平和の鳩〉を奪い取ったのである。盗まれた〈平和の鳩〉がす

ぐさまへピストルの弾Ⅱ武器Ⅲへと変形されるくだりには、へ平和維持を目的とした軍隊Ⅳ」という、そもそもが矛盾に満ちた存在である警察予備隊を用いて、大衆・共産主義者の平和運動を弾圧する³²という、占領軍や日本政府の思惑に対するコミニスト安部の痛烈な批判意識が込められていると言えよう。しかも目的を遂行した「政府」は、今度はその銃口の矛先を一時は利用した「手」へと突き付け、彼らの掲げる「平和」とは相容れない反・戦後の価値観の所有者である「手」を、最終的に「平和維持」の名の下に抹殺したのである。

結局、人々の欲望によって様々な形に歪形されていった「鳩」の流転の「運命」を語ったこの物語には、異なる政治的立場の者たちが、それぞれの思惑によって「平和」を理念に掲げ、その所有権を奪い合った結果、「平和」概念そのものが引き裂かれていった当時の状況が寓意的に描かれていたと読むことが出来るのではないだろうか。

5 離合集散の時代と共産党への傾斜

本稿では一九五一年前後の「鳩」をめぐる言説状況を確認しながら、小説「手」の同時代的な読みの可能性を追求してきた。「手」が執筆された一九五一年は、国内的には戦前から戦後にかけての価値観の転倒による思想的混乱を未だ引きずり、他方、国際的には民主主義と共産主義という異なるイデオロギーに支配された「二つの世界」が、互いに世界平和への強い決意を標榜しながら、「戦争を賭してでも平和を守る」という矛盾した論理に

よって、自己の暴力の正当性を誇示し合った時代であった。そうした時代に発表された本小説に描かれていたのは、人間がバラバラの存在となった相互の闘争の止まない世界であった。物語の中で、人々は同じ現実を前にしながら互いに異なる価値観によって世界を解釈しようとする。そこには「人間の連帯」と呼べるような確かなものは存在しない。対立者同士においては闘争のみが唯一のコミュニケーションとなり、また一たび手を組んだ者同士の間にも駆け引きや思惑がせめぎ合い、本来の理想そのものが歪形化されていくような世界が描かれていた。

一方、このような敵対者との闘争、身内同士の分裂・抗争は、当時の安部を取り巻く状況そのものでもあった。一九四九年六月、安部が編集長として尽力した「夜の会」の機関紙「夜」（月曜書房）の創刊は、内部の政治的対立によって失敗に帰し、「夜の会」そのものも破綻した。³³一九四九年五月「世紀の会」に絵画部が正式発足して以降、「美術の前衛と文学の前衛との提携」をもとに企図してきた北代省三・山口勝弘・福島秀子・池田龍雄ら前衛画家たちとの関係も、一九五〇年四月、安部に対する反発から絵画部メンバーのほとんどが脱退するという結末に終わった。³⁴次に「世紀の会」の建て直しのために「前衛美術会」との間に協調路線を模索したが、メンバーのほとんどが共産党員であった「前衛美術会」との立場の相違を埋めることができず、またやや空中分解に終わった。³⁵その後、残ったごくわずかの「世紀の会」メンバーとともに、安部はガリ版刷りの小冊子「世紀群」の刊行へと目標を転じたが、一九五〇年十二月、刊行の実現とともに会は

（発展的解散）に終わった。⁽³⁶⁾このような経緯の後、安部は翌一九五一年三月、仲間の勅使河原宏、桂川寛とともに共産党入党希望の意志を野間宏へ伝えるに至ったのである。

戦後日本の思想状況の一特徴を「サークル」という小集団の形成に見た鶴見俊輔によれば、成員の自発性に基づいた「やわらかな結合」から成るサークルにとつて「不安定性」はつきものであったが、その不安定性に苛立って多くのサークルがアカデミズム、コミュニケーション、ジャーナリズムといった、より「安定した航路」へと合流していく傾向が当時少なからず見られたと言ふ。⁽³⁷⁾鶴見の論考では、一九四六年一月から一九五二年九月にかけての時期は、特に共産党へと傾斜していったサークルが多かった時代として区分されているが、安部らの共産党入党への経緯との符合において興味深い指摘である。しかし、その共産党もまた、一九五〇年から五年にかけて、所感派と国際派との激しい分派抗争の渦中にあつたことは言うまでもない。

入党直後に発表された小説「手」からは、一種性急な実践主義的志向を強めた、若きコミュニスト安部公房の体制批判の意が読み取れると同時に、その一方で戦後の混沌的思想状況の中、他者との連帯を企図しつつも失敗を繰り返した、当時の安部の孤立感をも垣間見ることが出来るのではないだろうか。

註(1) 新潮社版『安部公房全集003』『作品ノート3（一九五一・五一―一九五三・九）』四頁。

(2) 増山太助「戦後運動史外伝・人物群像（二八）」——田中英光と安

部公房——（一九九七・四、労働運動研究会編『労働運動研究』三三〇号）。

(3) 鳥羽耕史「『世紀の会』と安部公房を語る——桂川寛氏インタビュー——」（二〇〇四・二、徳島大学総合科学部「言語文化研究」第十一巻）。

(4) 初出誌は一九五一年七月特大号「群像」（大日本雄弁会講談社）。「創作特集」に「手——他一篇——」として発表。「他一篇」とは再掲載の「事業」。初刊は一九五二年二月「飢えた皮膚」（書肆ユリイカ刊）。再刊は一九七二年五月「安部公房全作品2」（新潮社刊）、一九七三年七月、新潮文庫「水中都市・デンドロカカリヤ」（新潮社刊）。

(5) 広島平和文化センター編『平和事典』（一九八五・一〇、勁草書房）三七八・三七九頁。

(6) 前掲『平和事典』六一・六二頁。

(7) 城戸昇「東京南部戦後サークル運動の記録Ⅰ」（一九九二・七、文学同人眼の会）七四頁。

(8) 佐々木毅・鶴見俊輔他編『戦後史大事典 増補縮刷版』（一九九五、三省堂）資料六五・六六頁。

(9) 一九五一年「世界」八月号、出席者（入江啓四郎・都留重人・小幡操・尾形昭二・田中慎次郎）。

(10) 鳥羽耕史、前掲論文、一二二頁。

(11) 大嶽秀夫編『戦後日本防衛問題資料集』第一巻（一九九一、三三書房）四一九頁。

(12) 安部公房と野間宏との出会いは、瀬木慎一の証言などから一九四七年春頃と推測される。野間は当初より九歳年下の無名の安部に高い評価を置いており、入党申し込みの翌月の、安部の第二回戦後文学賞受賞の折には、選考委員の一人であった野間は「選後所感」の中で安部を「二十代の一つの方向」であると賛し、「自分が直立できたように感じる」と喜びを表した。

(13) 鳥羽耕史、前掲論文、一二二頁。

(14) 池田龍雄「夢・現・記」(一九九〇・五、現代企画室) 一四〇、一四三頁。

(15) 本文の引用は以下、新潮社版『安部公房003』(一九九七・一〇)による。

(16) 黒岩比佐子、前掲書、九〇・九一頁。

(17) 海後宗臣編『日本教科書大系 近代編 第八巻 国語(五)』(一九六四、講談社) 所収「小さい伝令使。一九三八年四月五日付『東京日日新聞』「血の翼に羽搏く五十キロ／重傷の身で果す通信の大使命／殊勲(可憐の伝書鳩)」、一九四〇年四月十六日付『東京日日新聞』「可憐翼の戦士／重傷を負うて帰る／主君の一六四〇五号」、一九四一年一月八日付『東京朝日新聞』「死の使ひ・可憐な「黄三線」／連絡を遂げた南京生れの鳩」など。

(18) 宮田光雄「平和のハトとリヴァイアサン」(一九八八・五、岩波書店)「聖書的象徴の系譜」I「平和のハト——平和のシンボルの精神史——」を参照。

(19) ローランド・ベンローズ「ピカソ その生涯と作品」(一九七八・六、新潮社) 四〇九頁。

(20) 宮田光雄、前掲書、四八―五二頁。

(21) CIE教育顧問であったイールズは、一九四九年七月の新潟大学での講演を皮切りに全国各地の大学でアメリカ的民主主義を賞賛し、「共産党の合法性を認めず」、「共産主義の教授を大学から追放すべきである」という講演をして回った。翌一九五〇年四月あたりから全学連を中心とした「反イールズ闘争」が行われるようになり、各大学で講演会が中止に追い込まれる騒ぎとなった。

(22) ピカソの共産党入党はバリ開放の一カ月後であったと今日言われているが、実際に明らかになったのは一九四四年十月、ポール・ガイヤールの質問にピカソ自身が答える形式で書かれた記事が「ニュー・マッセス」と「ユマニテ」紙に掲載されたことによる。

(23) 沖縄を長期保有する方針で一九五〇年十二月に設立された米国の現地統治機関「琉球列島米国民政府(ユスカー)」が、それまでの

沖縄、奄美、宮古、八重山各群島政府に代わる全琉的中央機構として、布令第十三号によって一九五二年四月一日に発足させた住民自治機関。

(24) 工学博士。一九五一年、田辺が早稲田大学教授から大学院教授へと昇格したことによって建築史研究室が創設。琉球古建築の調査研究に關して多大な成果を挙げた。そうした経緯から沖縄とも馴染み深い関係にあるとして、田辺のもとに制作依頼が寄せられたものと思像される。

(25) 一九五四年四月十四日付『琉球新報』(朝刊・三面)より。「鳩が平和のシンボルであることは、世界共通のものであり、日本の煙草ビースにしろ鳩のデザインで平和を象徴している。この問題は責任の所在をさておき、根本的に軍の見解そのものの間違いを指摘する必要があると思う」。

(26) 沖縄人民党のこと。

(27) 藤原彰「日本軍事史 下巻 戦後編」(一九八七・十一、日本評論社) 三〇―三三頁。

(28) 「警察予備隊令」(抄) 第一条「この政令は、わが国の平和と秩序を維持し、公共の福祉を保護するのに必要限度内で、国家地方警察及び自治体警察の警察力を補うため警察予備隊を設け、その組織等に関し規定することを目的とする。」(官報) 一九五〇・八・一〇。

(29) 藤原彰、前掲書、三三・三四頁。

(30) 大嶽編、前掲「戦後日本防衛問題資料集」第一巻、四一六頁。

(31) 一九五〇年一〇月、林敏三「総監就任に際しての訓話」(草地貞吾編『自衛隊史』一九八四、日本防衛調査協会) より。

(32) 当時の警察予備隊の発砲事例を一例挙げておく。一九五〇年一〇月二七日、東京都大田区梶谷の電業社で、バージを通告された十八名が支援労働者約二〇〇名に守られながら強行入門に及んだ折、出勤した浦田警察署と第二方面予備隊約二〇〇名との間で乱闘騒ぎとなった。このとき予備隊員六名が拳銃を一斉発射、その一発がバー

新刊紹介

関口安義著

『悲運の哲学者 評伝藤岡蔵六』

菊池寛、久米正雄、山本有三、恒藤恭、長崎太郎らと共に、藤岡蔵六は芥川龍之介の一高同窓生である。なかでも藤岡は芥川と親しく付き合ひ、恒藤恭と共に「三羽鳥」と評されていた。芥川研究家として知られ、かねてより藤岡蔵六という人物に注目していた著者関口安義氏は、遺族から提

ジ通告を受けた山岸昭夫の左腿を背後から撃ち抜いた。安部が勅使河原宏・桂川寛とともに、この下丸子、蒲田、梶谷付近の工場街で文化オルグを開始したのは、当事件の五ヶ月後のことであつた。

(城戸昇、前掲書、八一・八二頁参照)

(33) 瀬木慎一『アヴァンギャルド芸術 体験と批判』(一九九八、思潮社、三一・三三頁)。

(34) 瀬木慎一『戦後空白期の美術』(一九九六、思潮社) 九〇〜九八頁。

(35) 瀬木、前掲『戦後空白期の美術』一〇〇頁。

(36) 瀬木、前掲『戦後空白期の美術』九八・九九頁。

(37) 鶴見俊輔『戦後日本の思想状況』(一九五七、『現代思想』第十一卷、岩波書店) 七〇〜七五頁。

供された資料や現地調査をもとに、彼の生い立ちを本書に記した。さて、芥川はその藤岡に対して次のような言葉を残している。

「僕の友達も多けれども、藤岡位損をした男はまづ外にあらざるべし」

また、「数少ない藤岡蔵六参考文献の一つ」として紹介されている野田弥三郎氏の文章には次のような題がつけられている。

「薄幸の哲学者：藤岡蔵六さんを偲ぶ」

そして本書の題は「悲運の哲学者 評伝藤岡蔵六」である。華々しいメンバーと共に

に青春期を過ごし東京帝国大学文科哲学専修を首席で卒業しながらも、成功から見放され「損」「薄幸」「悲運」といった言葉で人生を語られてしまうのは何故なのか。

「悲運」の発端となった「藤岡事件」や一高時代の様子を織り交ぜながら、今まで余りに語られてこなかった「損をした」男の人生が、ここに明かされる。

(二〇〇四年七月 EDITION 四六判 一二八頁 税込二五〇〇円) (水野 巧)